

第1章 保存調査の目的

第1節 保存調査に至る経緯

五島は、日本の西端の離島という地理的要因から古来より大陸との交流の窓口となり、遣唐使派遣時代には中国へ渡る日本最後の寄港地として知られてきた。島内には遣唐使ゆかりの寺社、史跡等が数多く所在する。また、江戸時代後期に潜伏キリシタンが逃れてきた歴史的背景から、キリスト教の教会堂が数多く所在することでもよく知られた島でもある。これらの一部は五島の地域史に欠くことが出来ない貴重な文化遺産として保護・活用が図られている。

最近では、平成19年1月に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界文化遺産暫定リストに登録され、その構成資産候補「旧五輪教会堂」「江上天主堂」「堂崎教会」が所在する地域として近年注目を集めている。

そうした中、独特の集落景観は五島が辿ってきた歴史・文化により形成された文化的景観として捉え、下五島地域の文化的景観が有する価値について調査すべく、国及び県の補助を受けて、下五島地域の文化的景観保存調査を実施することになった。

第2節 保存調査の方法と内容

下五島地域は、奈留島、久賀島、福江島の主要島と属島からなり、主な基幹産業は第1次産業である。中でも久賀島は、古来より椿油の生産地として名高く、島内にはヤブツバキの自生が目立つ。またキリシタン集落が点在し、教会と集落は地形的特徴、周囲の自然環境と相まって独特の景観を有している。

このような状況から、下五島地域の文化的景観を文化資源として捉え、下五島地域の地域再生・活性化に資するため、「下五島文化的景観保存調査委員会」を設置し、下五島地域における文化的景観の特徴や価値付けを行い、文化的景観保存管理計画を策定するため平成20年度から22年度にかけて保存調査を実施した。

①調査項目

調査にあたっては、以下の内容について調査を進めた。

- ①集落景観… 景観構成要素の整理、景観特性の構造的把握
- ②地質と地形… 調査範囲の地質学的調査
- ③社会調査… 生業、生活、社会構造等の調査
- ④歴史・民俗… 地域史を中心に、歴史学・民俗学的調査
- ⑤建築… 景観構成要素となる建築物の調査
- ⑥植生… 調査区域内の自然・植生調査

第2章 五島市の概要

第1節 位置と環境

(1) 位置と環境

五島市が所在する五島列島は、九州の最西端に位置し、北東から南西へと連なる列島であり、北から、中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の主要島と属島からなる。明確な境界があるわけではないが、一般的に中通島、若松島を上五島地域、奈留島、久賀島、福江島を下五島地域と呼称し、それが行政単位の新上五島町、五島市となっている。

五島市は、長崎港の西方海上約100kmにある福江島を主島に、奈留島、久賀島、椀島、黄島、赤島、蕨小島、黒島、島山島、嵯峨島、前島の11の有人島と52の無人島から構成されている。総面積は420.81k㎡で、地形はきわめて複雑で火山群を伴っており、また多くの溺れ谷を持ち、その海岸線は屈曲に富んでいる。

気候は列島西を通る対馬海流の影響で比較的温暖であり、年間平均気温は16.5℃、降水量は2,300mm前後である。年間平均風速は3.3m/s、最大風速10m/s以上の年間日数は27日となっており、とくに冬場の北西風が強い。また、台風常襲地帯でもある。

平成16年8月、下五島地域を構成する福江市、富江町、玉之浦町、三井楽町、岐宿町、奈留町が合併し、五島市となった。



下五島地域の地勢

(2) 人口構造

平成17年度に実施された国勢調査によると、五島市の総人口は44,765人で、前回（平成12年）より、3,768人(7.8%)の減少となっている。最も減少率が高いのが奈留地区の14.9%で、次いで三井楽地区13.8%、玉之浦地区12.6%、富江地区10.4%、岐宿地区7.7%、福江地区4.9%の順になっている。また、地区別の人口構成は福江地区26,311人と全体の58.8%を占め、次いで富江地区12.8%、岐宿地区8.9%、三井楽地区7.7%、奈留地区7.5%、玉之浦地区4.3%と続いている。

1世帯あたりの平均世帯人員は2.3人で、前回（平成12年）より0.1人減少している。地区別では福江地区2.4人、富江地区2.2人、玉之浦地区2.2人、三井楽地区2.3人、岐宿地区2.4人、奈留地区2.1人となっている。

年齢構成の割合については、年少人口(15歳未満)13.8%、生産年齢人口(15歳～64歳)55.7%、高齢人口(65歳以上)30.5%となっており、前回（平成12年）と比べると年少人口2.3%、生産年齢人口1.8%の減少に対し、高齢人口は4.1%増となっており、少子高齢化がますます進んでいることが分かる。

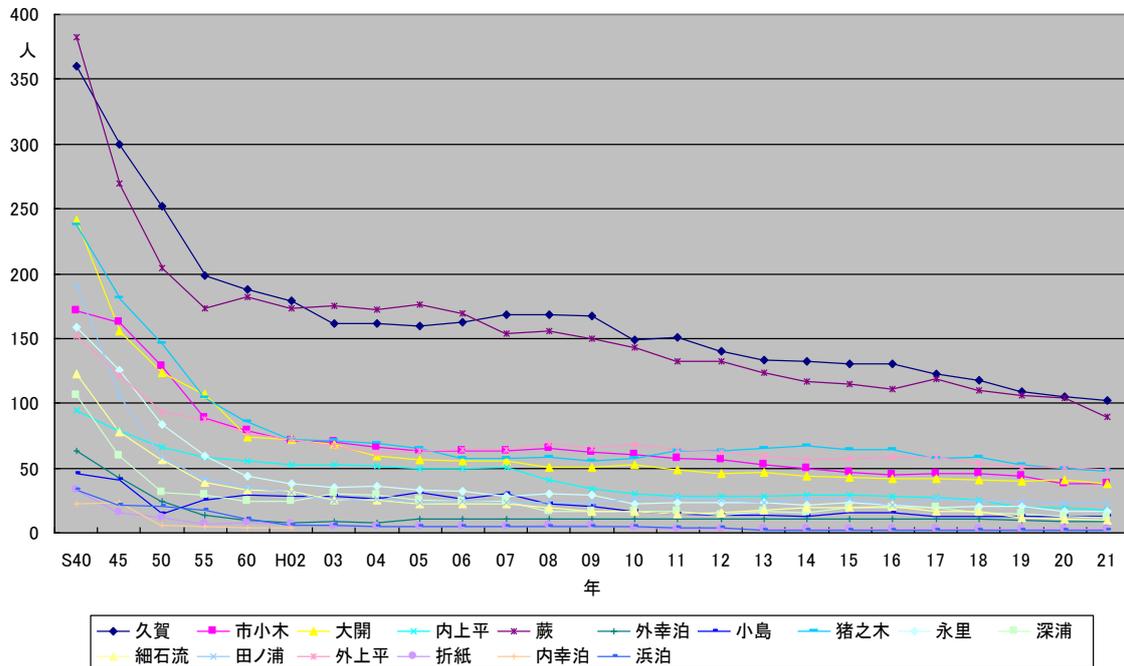
人口及び世帯数推移

年次	人口(人)			世帯数(戸)	人口増減数(人)	人口増減率(%)	1世帯当たり人員(人)
	総数	男	女				
昭和30年	91,973	45,390	46,583	18,596			4.9
昭和35年	87,232	42,751	44,481	19,401	▲ 4,741	▲ 5.2	4.5
昭和40年	78,642	38,086	40,556	19,542	▲ 8,590	▲ 9.8	4.0
昭和45年	68,649	32,547	36,102	19,206	▲ 9,993	▲ 12.7	3.6
昭和50年	63,410	30,040	33,370	19,230	▲ 5,239	▲ 7.6	3.3
昭和55年	60,947	28,819	32,128	20,159	▲ 2,463	▲ 3.9	3.0
昭和60年	57,736	27,082	30,654	20,473	▲ 3,211	▲ 5.3	2.8
平成2年	54,143	25,132	29,011	20,187	▲ 3,593	▲ 6.2	2.7
平成7年	51,295	23,690	27,605	20,113	▲ 2,848	▲ 5.3	2.6
平成12年	48,533	22,493	26,040	19,967	▲ 2,762	▲ 5.4	2.4
平成17年	44,765	20,610	24,155	19,305	▲ 3,768	▲ 7.8	2.3

各年10月1日現在

国勢調査

集落別人口(久賀)



(3) 就業者数と産業構造

本市の就業者数は、人口減少と相まって年々減少している。昭和30年には39,353人だったのが、平成17年には18,858人となり、52%の減少率となっている。

産業別就業者数を見ると、平成17年の国勢調査では、第1次産業が17.1%、第2次産業は16.1%、第3次産業が66.7%となっており、昭和30年と比較すると第1次産業が88.5%の減少、第2次産業が0.01%の減少、第3次産業が150%の増加となっている。

産業(大分類)人口推移

年次	第1次産業人口		第2次産業人口		第3次産業人口		分類不能		総数	前回比較
	人	割合(%)	人	割合(%)	人	割合(%)	人	割合(%)		
昭和30年	28,220	71.7	3,079	7.8	8,053	20.5	1	0.0	39,353	
昭和35年	23,970	65.6	3,509	9.6	9,075	24.8	8	0.0	36,562	▲ 2,791
昭和40年	18,603	59.3	2,895	9.2	9,853	31.4	13	0.0	31,364	▲ 5,198
昭和45年	14,453	51.7	2,702	9.7	10,779	38.6	2	0.0	27,936	▲ 3,428
昭和50年	11,154	45.8	2,520	10.3	10,663	43.8	20	0.1	24,357	▲ 3,579
昭和55年	9,571	38.3	3,438	13.8	11,948	47.9	7	0.0	24,964	607
昭和60年	8,410	35.2	3,274	13.7	12,198	51.0	14	0.1	23,896	▲ 1,068
平成2年	5,901	26.4	4,244	19.0	12,241	54.7	5	0.0	22,391	▲ 1,505
平成7年	4,787	22.0	4,136	19.0	12,826	59.0	2	0.0	21,751	▲ 640
平成12年	3,616	17.8	3,923	19.3	12,785	62.9	5	0.0	20,329	▲ 1,422
平成17年	3,227	17.1	3,030	16.1	12,584	66.7	17	0.1	18,858	▲ 1,471

各年10月1日現在

国勢調査

(4) 地質及び地形

①概要

五島列島の大部分の地質は、五島層群とよばれる新第三紀中新世に堆積した砂岩、泥岩、及び安山岩質凝灰岩などで構成されている。この基盤層に花崗岩類、玢岩が進入し、流紋岩、粗粒玄武岩などが岩脈として貫入している。椏島及び周辺の島々は進入した玢岩からでき、花崗斑岩の進入によってダイアスポア、蠟石を主とする熱水鉱床ができた。

火山活動による玄武岩類は、福江島の南東部（福江）、北部（岐宿）、北西部三井楽）、南部（富江）に分布する。福江島に分布する玄武岩は、環日本海新生代アルカリ岩石区の西端にあたり、その噴火活動時期は洪積世—沖積世である。

五島列島の地形を海底地形から概観すると、およそ 100m 以浅の浅海によって九州本土と結びつき、構造的に九州の半島とみなすことができる。また、中国大陸の東端に位置し、アジア大陸の東縁に広がる大陸棚の一部とみなすこともできる。

五島列島は、新第三紀中新世およそ 2000 万年前頃の堆積物と 1500 万年前頃に貫入した花崗岩類及び地殻運動で骨格が造られている。日本列島は、中新世前期までアジア大陸に接続し、この東端の部分に淡水湖が点々と分布していた。やがて 2100 万～1100 万年前にはさらに断裂は大きくなり、西南日本は長崎県対馬南西部付近を中心に時計回りに 40～50 度回転し、同時に東北日本は北海道知床半島沖付近を中心に、こちらは反時計回りに 40～50 度回転したとされる。五島列島の基本的構造が北東～南西であることは、この地殻変動による褶曲運動、断層運動、マグマの貫入によって決定されたと考えられる。

この基本構造に直角に横切る北西～南東の断層も発達する。これは沖縄トラフの活動の影響により形成されたと考えられ、この断層が五島列島の主要島を分離する瀬戸となっている。

これらの地殻運動、陸地の浸食及び沈水は、島の分離、溺れ谷の形成、各島の谷や山稜、瀬戸の方向に大きく反映し、出入りの激しい海岸線と多島海を形成している。福江島中央部の山内盆地は、花崗岩類が深層風化し浸食されたのに対し、周囲は熱変質を受け岩石が硬化し、浸食されずに急峻な山地形を形成している。同様に花崗岩類が広く分布する久賀島久賀湾も盆地状地形をなしている。

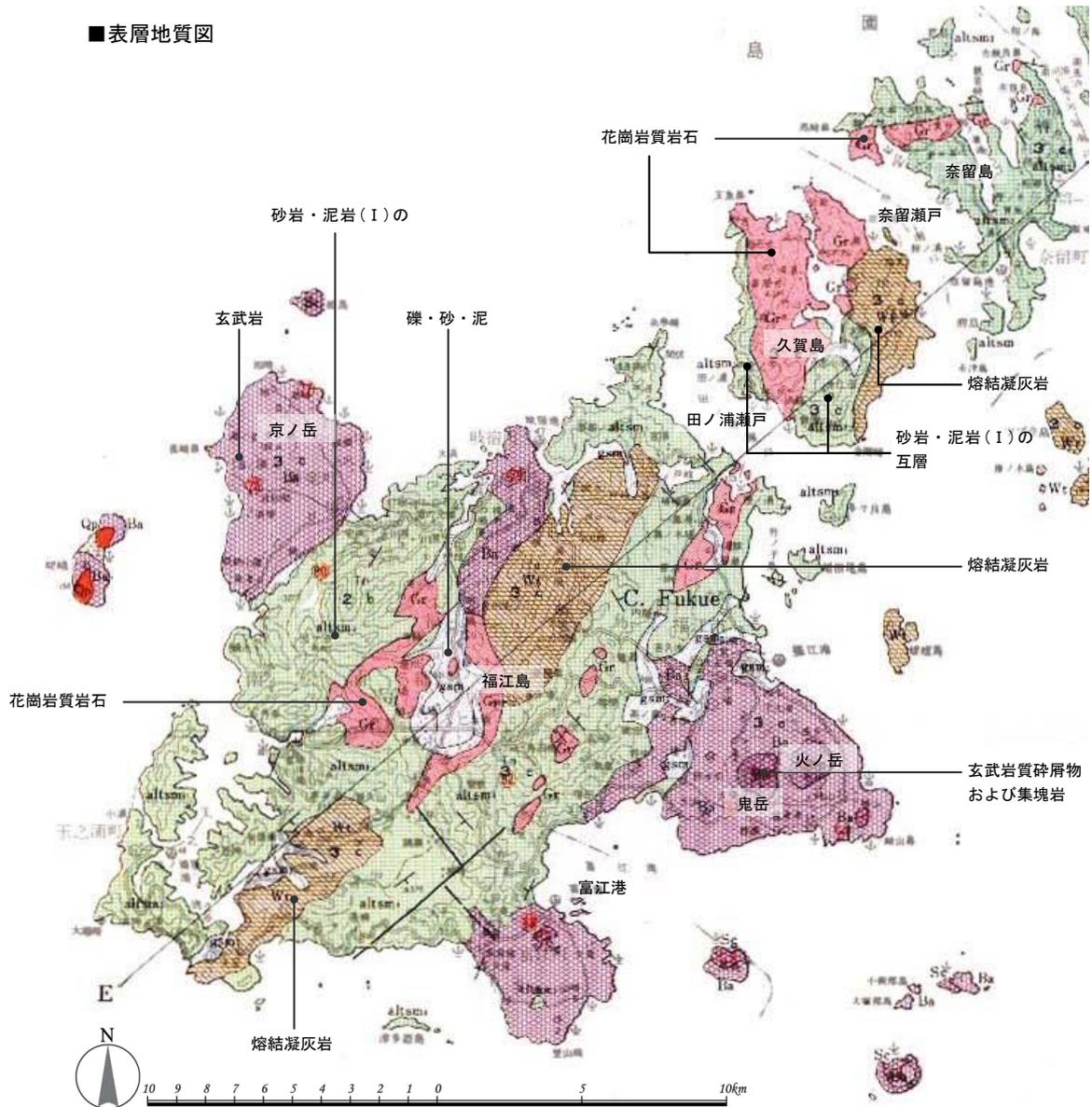
第四紀になり、北東～南西方向の断層に沿って火山活動が始まり、福江島の北西部、南部、南東部に火山性台地が形成され、沖合には火山活動で形成された島々が浮かぶ。これらの地形は、基本構造の急峻な山地形と異なり、なだらかな台地を形成している。

②地形による景観

下五島地域の海岸地形は火山地形とともに重要な自然的景観となっている。この代表的ものは沈水地形である玉之浦湾、岐宿湾、戸岐湾、奥浦湾などの溺れ谷である。また、五島の海岸地形の優れた特徴は海食地形にある。風波や海流は地層の断層、節理、軟層を浸食し、海食崖や海食洞をつくっている。福江島の西方に浮かぶ嵯峨島の西海岸は、海食により火山の西半分が失われ、二つの火山の断面が表れ火山噴出物の堆積状況がよく観察できる。

福江島の南西海岸には、高さ数十mの海食崖が島山島西海岸から大瀬崎、大宝まで総延長

■ 表層地質図

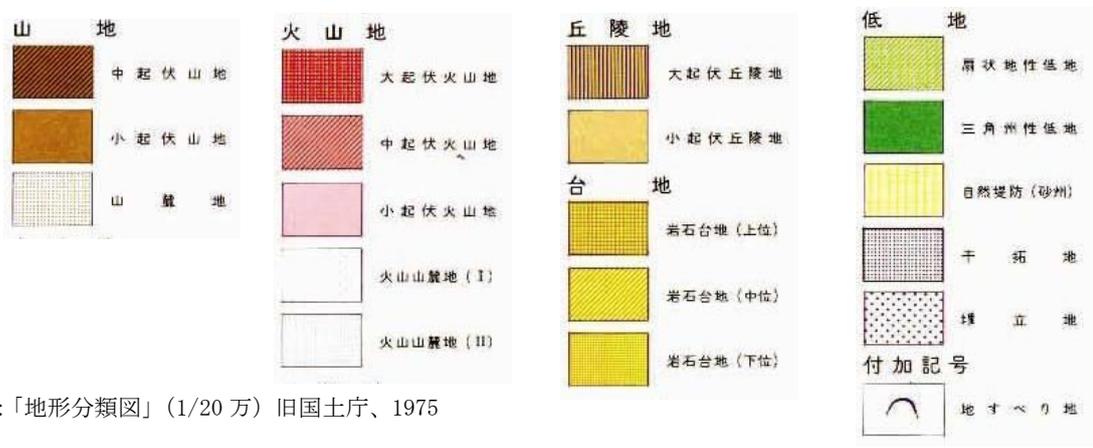
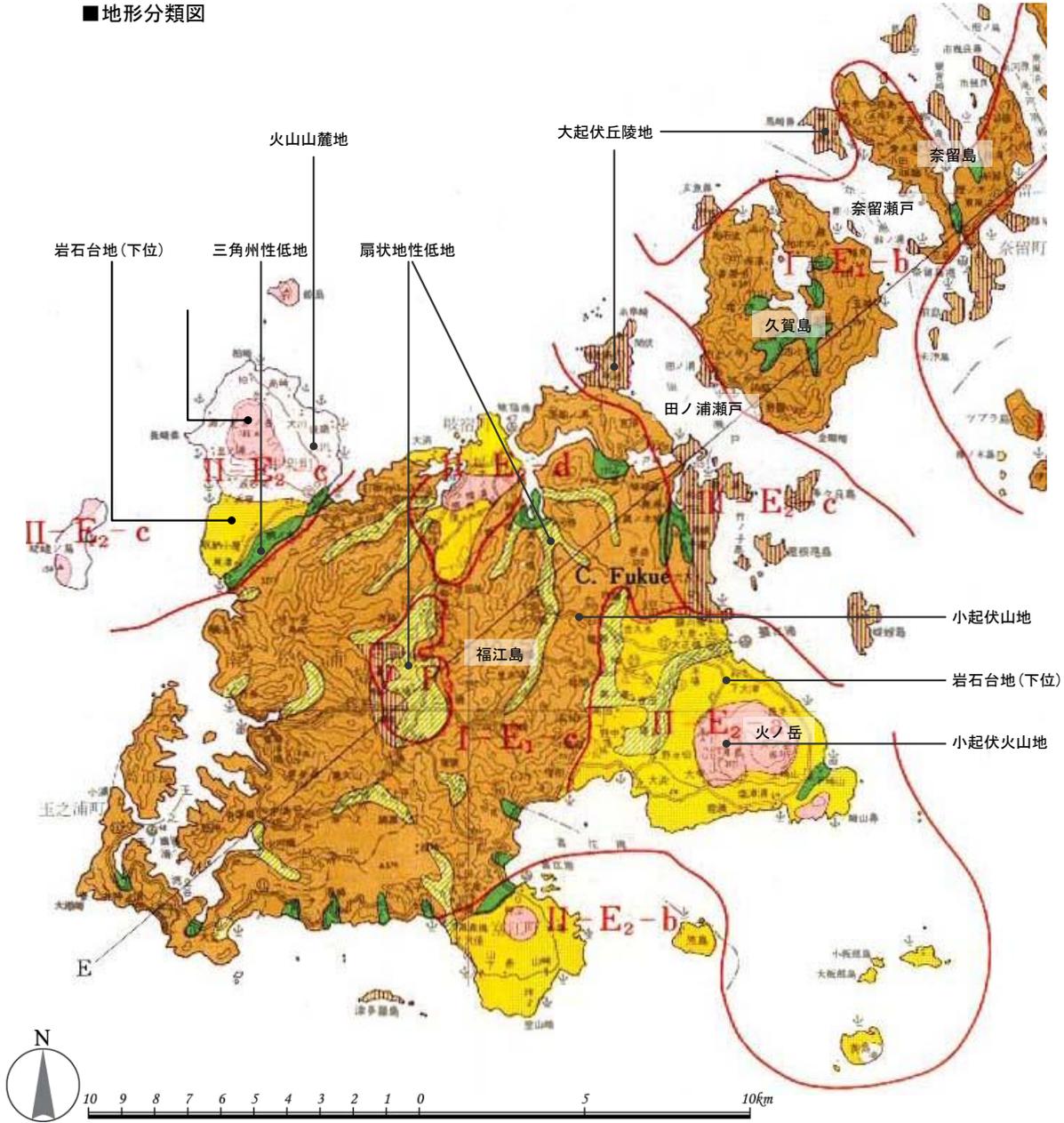


凡例

未 固 堆 積 物	<table border="1"> <tr><td>s</td><td>砂</td></tr> <tr><td>esms</td><td>礫・砂・粘土(I)</td></tr> <tr><td>esms</td><td>礫・砂・粘土(II)</td></tr> <tr><td>cl</td><td>砂層物</td></tr> </table>	s	砂	esms	礫・砂・粘土(I)	esms	礫・砂・粘土(II)	cl	砂層物	半 固 結 — 固 結 堆 積 物	<table border="1"> <tr><td>algsms</td><td>砂・礫・砂岩 互層</td></tr> <tr><td>altsms</td><td>砂岩・泥岩(I) の互層</td></tr> <tr><td>altsms</td><td>砂岩・泥岩(II) の互層</td></tr> <tr><td>ms</td><td>頁岩</td></tr> <tr><td>ss</td><td>砂岩および 砂がち互層</td></tr> <tr><td>altsms</td><td>砂岩・泥岩 互層</td></tr> <tr><td>algsms</td><td>礫・砂岩 互層</td></tr> </table>	algsms	砂・礫・砂岩 互層	altsms	砂岩・泥岩(I) の互層	altsms	砂岩・泥岩(II) の互層	ms	頁岩	ss	砂岩および 砂がち互層	altsms	砂岩・泥岩 互層	algsms	礫・砂岩 互層	火 山 性 岩 石	<table border="1"> <tr><td>By</td><td>流紋岩質老岩</td></tr> <tr><td>Ab</td><td>角閃石安山岩</td></tr> <tr><td>Py</td><td>火山碎屑岩</td></tr> <tr><td>Abp</td><td>輝石安山岩</td></tr> <tr><td>Ab</td><td>凝灰角礫岩</td></tr> <tr><td>Wp</td><td>熔結凝灰岩</td></tr> <tr><td>By</td><td>安山岩</td></tr> </table>	By	流紋岩質老岩	Ab	角閃石安山岩	Py	火山碎屑岩	Abp	輝石安山岩	Ab	凝灰角礫岩	Wp	熔結凝灰岩	By	安山岩	<table border="1"> <tr><td>Bs</td><td>玄武岩</td></tr> <tr><td>Sp</td><td>玄武岩質碎屑物 および集塊岩</td></tr> <tr><td>Mt</td><td>有安輝岩</td></tr> </table>	Bs	玄武岩	Sp	玄武岩質碎屑物 および集塊岩	Mt	有安輝岩	深 成 岩 変 成 岩	<table border="1"> <tr><td>Gr</td><td>花崗岩質岩石</td></tr> <tr><td>Sp</td><td>石英斑岩 斜長斑岩</td></tr> <tr><td>Gs</td><td>斑れい岩</td></tr> <tr><td>Sp</td><td>蛇紋岩</td></tr> <tr><td>Hr</td><td>ホルンフェルス</td></tr> <tr><td>Gs</td><td>緑色片岩</td></tr> <tr><td>Bs</td><td>黒色片岩</td></tr> </table>	Gr	花崗岩質岩石	Sp	石英斑岩 斜長斑岩	Gs	斑れい岩	Sp	蛇紋岩	Hr	ホルンフェルス	Gs	緑色片岩	Bs	黒色片岩
s	砂																																																															
esms	礫・砂・粘土(I)																																																															
esms	礫・砂・粘土(II)																																																															
cl	砂層物																																																															
algsms	砂・礫・砂岩 互層																																																															
altsms	砂岩・泥岩(I) の互層																																																															
altsms	砂岩・泥岩(II) の互層																																																															
ms	頁岩																																																															
ss	砂岩および 砂がち互層																																																															
altsms	砂岩・泥岩 互層																																																															
algsms	礫・砂岩 互層																																																															
By	流紋岩質老岩																																																															
Ab	角閃石安山岩																																																															
Py	火山碎屑岩																																																															
Abp	輝石安山岩																																																															
Ab	凝灰角礫岩																																																															
Wp	熔結凝灰岩																																																															
By	安山岩																																																															
Bs	玄武岩																																																															
Sp	玄武岩質碎屑物 および集塊岩																																																															
Mt	有安輝岩																																																															
Gr	花崗岩質岩石																																																															
Sp	石英斑岩 斜長斑岩																																																															
Gs	斑れい岩																																																															
Sp	蛇紋岩																																																															
Hr	ホルンフェルス																																																															
Gs	緑色片岩																																																															
Bs	黒色片岩																																																															

出典:「表層地質
図」(1/20 万)
旧国土庁、1975

■地形分類図



出典：「地形分類図」(1/20万) 旧国土庁、1975

約 15km にわたって続き、その壮大な景色から五島を代表する自然景観地となっている。海食崖はまた、久賀島の西海岸にも発達する。

海食洞は、福江島北部の沖合に浮かぶホゲ島をはじめ、五島ではよく見られる地形的景観である。

海食崖などから供給された砂礫等が運搬堆積され、砂嘴となることもある。その代表的なものが久賀島田ノ浦の湾口をなすもので、長さ 400m にも及んでいる。福江島の南に浮かぶ黄島宮の鼻も同様の砂嘴地形で、いずれも砂嘴の内側を港として利用し、周囲に集落が形成されている。福江島北東部の堂崎海岸では、砂嘴が発達し岬の先端と小島を結び陸繋島となっている。このような地形は奈留地区においてもみられ、前島と末津島は干潮時に砂嘴によって陸繋島となる。

砂嘴の成長で湾口が完全に閉ざされると内側に潟湖（ラグーン）ができる。このような地形は奈留島においてよく見られ、汐池、皺の浦に典型例が観察できる。このうち汐池地区では、砂嘴上に集落が築かれており、特異な集落景観を有している。やがて潟湖が堆積物で埋められると平野となり耕作地として利用されるが、福江島南部の大浜、田尾にその例が見られる。

入江に堆積した砂礫は、浜堤や砂丘、砂浜海岸をつくり、主に福江島において顕著にみられる。福江島東部の六方、北西部の白良ヶ浜、高浜、頓泊、南部の丸子、田尾、大浜、香珠子などにみられ、かつては周囲に松が生い茂り文字通り白砂青松の美しい景観をなしていた。いずれも海水浴場として利用されている。

福江島の火山性台地の海岸部には、火山から流出した溶岩で形成された溶岩海岸が広がり、五島列島の他地域では見られない海岸景観となっている。特に南部の鑑瀬海岸は五島を代表する景勝地としてよく知られている。また、火山活動により形成された火山体のうち、福江島南東部にある鬼岳火山群の火山体は比較的良好にのこされている。特に鬼岳は山体全体が草原となっており、市民憩いの場や観光名所にもなっており、重要な景観資源でもある。

火山活動により形成された特異な地質現象として、溶岩トンネルがある。これは、火山活動によって噴出した軟らかい玄武岩質溶岩が波打ちながら流れ出る際に、溶岩の表面と下部が固結して、内部の固結していない溶岩が流出して空洞をつくったものである。このような溶岩トンネルは福江島南部の富江地区と、福江島南の沖合に浮かぶ黄島に確認されており、ともに長崎県の天然記念物に指定され、保護が図られている。



黄島溶岩トンネル



鬼岳



大瀬崎断崖



大瀬崎粗粒玄武岩の平行岩脈群



嵯峨島火山海食崖

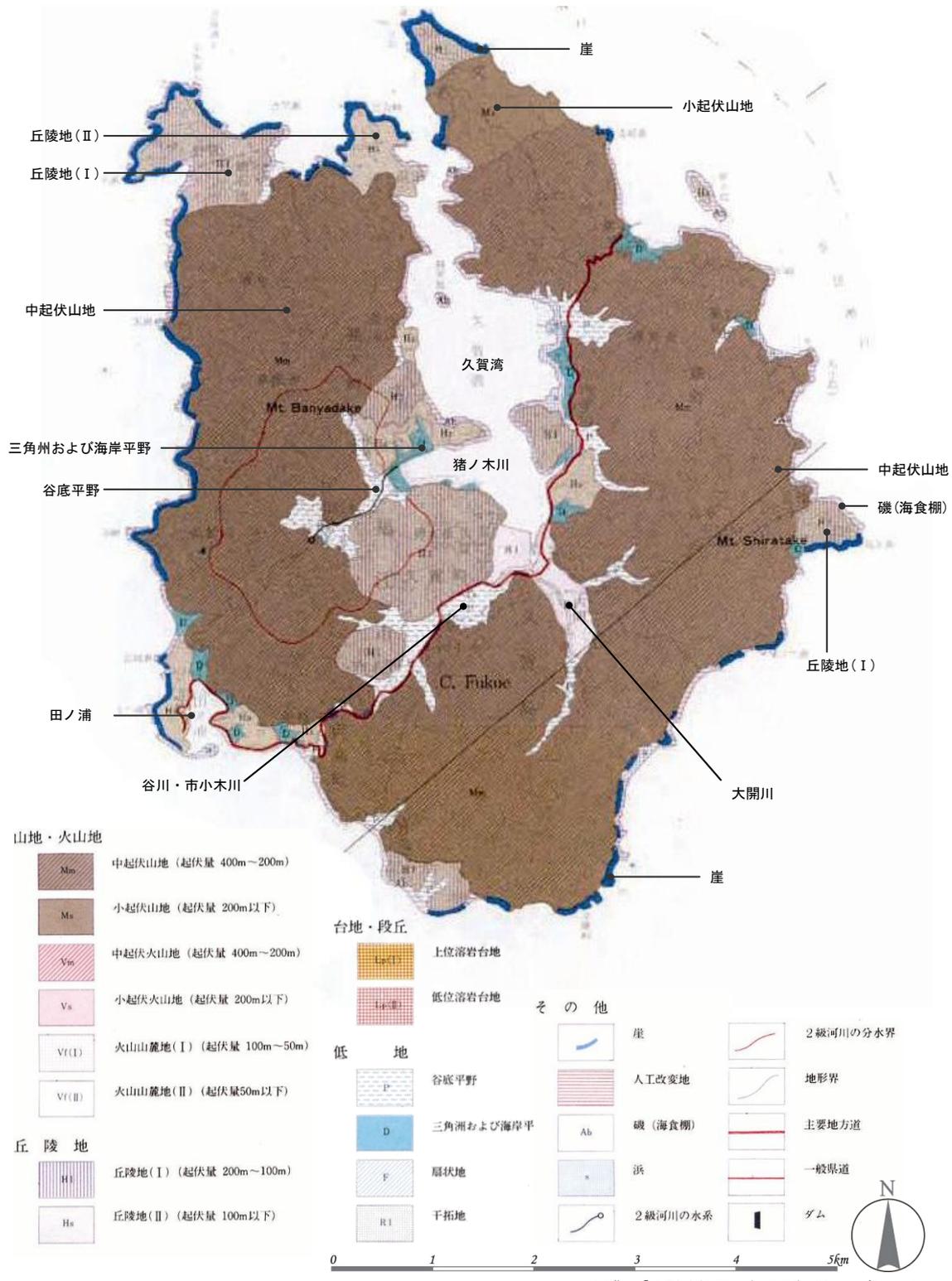


奈留島・池塚のビーチロック

③久賀島の地形・地質

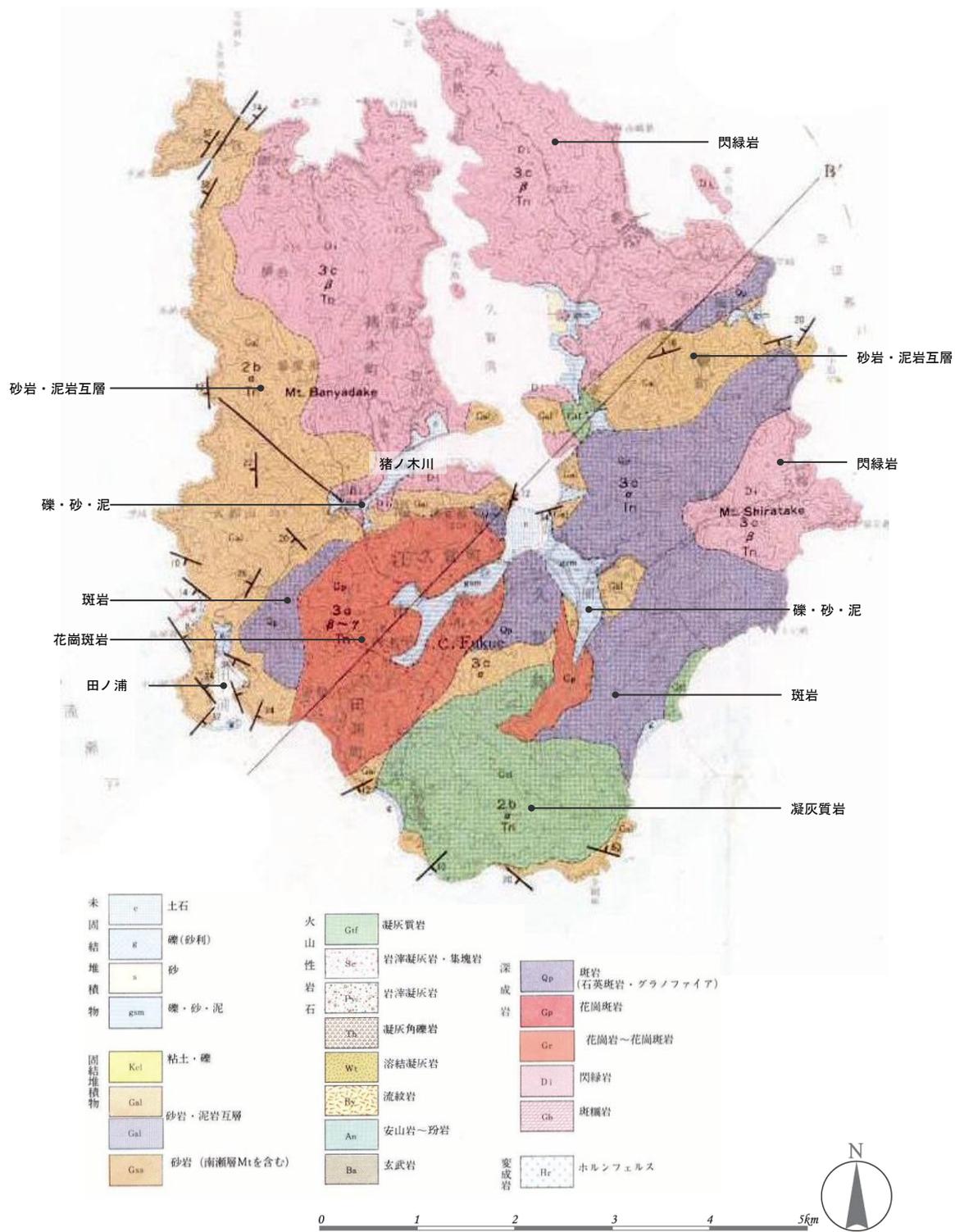
本調査の対象地域である久賀島は、福江島の北東に位置している。

地形は東西に約 5km、南北に約 7km、総面積は約 37.35 km²で、北部から島の中部にかけ



出典：「地形分類図」(1/5万)旧国土庁、1974

て約5kmにのびる久賀湾を中心に馬蹄形の形状をなしている。この久賀湾を囲んで見下ろすように2~300m級の山々が連なっており、これらの山系の湧水を源流とした複数の河川が



島内各地の各集落に流入している。山系の分水嶺は基本的に外海寄りに偏っているため、久賀湾を囲む地域は傾斜が緩やかで河川の流域面積は広いのに対し、外海に面した地域は比較的急傾斜で河川が短い傾向となる。久賀湾に面した地域は、湾に流れ込む中小河川の影響により浸食され、下流域には浸食作用の結果形成された極小規模の沖積地が点在し水田が拓か

れているが、河川沿いにも五島列島では稀な棚田・段畑群が形成されている。また、長崎県の島嶼部をはじめとして、全国的に島嶼地域においては水利環境が厳しいのが一般的であるのに対して、久賀島においては島嶼地域では稀といえる豊富な湧水を基礎とした棚田や段畑などの農業景観が形成されている。

久賀湾の中心部、久賀泊地の水深は 18m の平坦地となっているが、弁天島東の水深 21m にある凹地は北に延び、深さを増してトモロ崎で 25m と海溝状となる。しかし、湾口部の赤ハゲ鼻では水深 14m と浅くなる。島の西側は山腹が海岸まで迫り、海食崖が発達し海食洞もみられる。一方、田ノ浦湾は水深 10～13m ほどあり、南西端から東へ砂嘴が発達しており、標高 5～6m、幅数 10m、長さ 400m ほど延びている。



田ノ浦湾と砂嘴



西海岸の断崖

久賀島の地質は、第三紀中新世に堆積した堆積岩類と中新世中期に貫入した花崗岩類からできている。堆積岩は砂岩、泥岩及び凝灰岩で、一部熱変成を受け硬化、ホルンフェルス化している。堆積岩の全層厚は 650m を超えており、主に島の西部及び南部域の一部に分布する。西海岸の切り立った崖は、堆積岩からできている。火山活動と密接に関係する凝灰岩は、島の南部で厚く数cmの角礫を含む角礫凝灰岩で、北部で次第に薄くなる。また、火山豆石が福江島北部、久賀島、奈留島から見られ火山活動による降灰時の降雨を推測させる。

島の北部から東部の広い範囲に五島花崗岩類が分布している。多くは花崗斑岩－石英斑岩と呼ばれるもので、斑晶が小さく有色鉱物の少ないことを特徴とする。風化を受けると全体的に軟らかくなり、長石は白い粘土鉱物変化し、石英はガラス質で残り、黒雲母は褐色を呈し周辺の鉱物を褐色に染めている。さらに風化が進み「真砂土（まさど）」となることもある。

浜脇の海岸から久賀町にかけて道路沿いに露出するものは、福江島北東部（田ノ浦瀬戸を挟んで田ノ浦の対岸にあたる）の奥浦地区に分布する花崗斑岩の延長で、溶触された同形の石英を含む福江島に普通に見られるタイプである。細石流から深浦、猪之木にかけては、角閃石や黒雲母を含むアルカリ花崗岩に分類されるものが分布する。内幸泊から蕨にかけては、黒雲母、角閃石、長石の小さい結晶で構成された花崗閃緑岩が分布する。折紙地区では、有

色鉱物をほとんど含まない。弁天島は角閃石が黒雲母より多い花崗閃緑岩。花崗閃緑岩は、五島列島に普通に見られる花崗岩類を捕獲しており、花崗岩類貫入後に花崗閃緑岩の貫入があったことがわかる。

久賀島には北西－南東及び北東－南西方向の斑岩や玄武岩類の岩脈が数多く認められ、小断層の方向とも一致している。

(2) 植生

①概要

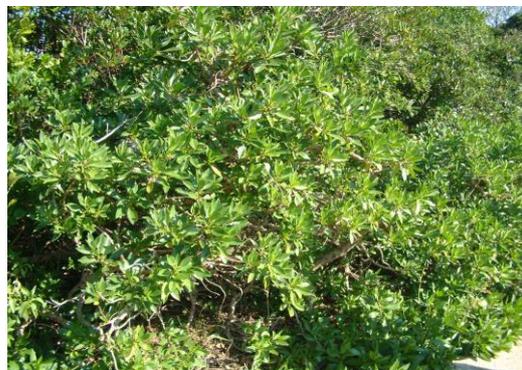
五島列島は、西方沖を流れる対馬暖流の大きな影響を受け、気候は温暖で、全域に照葉樹林帯が広がり、その代表的植物はヤブツバキ（ツバキ原種）、タブ、スダジイなどであり、また亜熱帯系の植物が多いのが特徴である。地理的にも地質的にも複雑であることから、植物の種類も多く、特に「九州西廻り型分布」の南方系植物ヘゴ、リュウビンタイ、ハマジンチョウ等は植物学的に貴重である。五島列島は、これら亜熱帯系植物の自生北限地となっており、地域によっては自生地一帯を天然記念物として文化財に指定し、保護を図っている。

下五島地域の広い範囲で、「シイ・カシ萌芽林（伐採後の切り口付近からの萌芽を育てた森林）」と「スギ・ヒノキ植林」があり、奈留島及び久賀島の西部、福江島の中央部に両者が入り組んで分布している。「ハマビワ－オニヤブソテツ群落」は、下五島地域の海岸沿いに分布しているのが特徴的である。「ススキ－チガヤ群落・ススキ－メカルガヤ群落」は、奈留島及び久賀島の西部、福江島の南半分において散見される。「アカマツ－オンツツジ群落」は、久賀島中央部と福江島の広い範囲で散見される。福江島北西部、南東部には「畑地雑草群落」が広く分布し、また「クロマツ群落」が散見される。

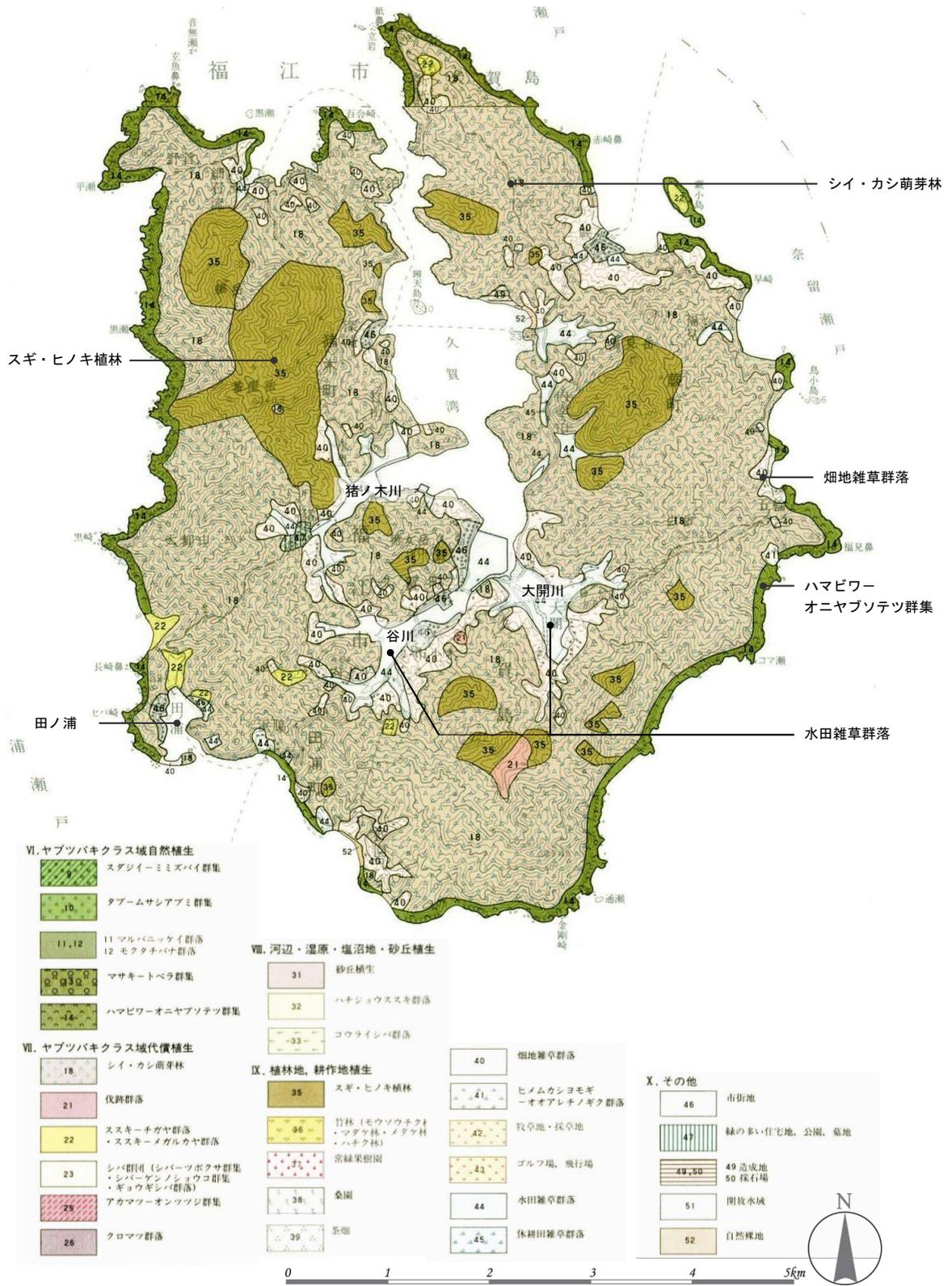
五島列島には、神社の社叢以外には原生林がほとんど残っていない。これは、江戸期になって生活燃料、建築用材として伐採されてばかりでなく、製塩業・煮干製造等の薪として盛んに切り出され、また島外にも売り出されたためである。



ヘゴ（五島ではオニヘゴと呼称）

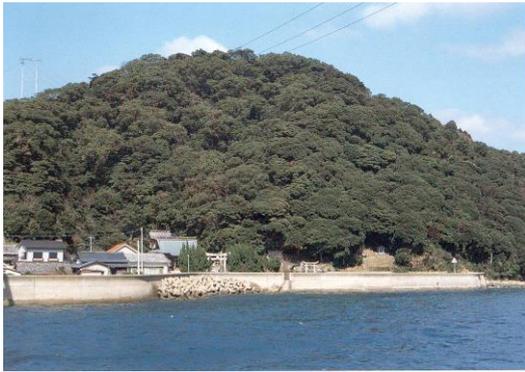


ハマジンチョウ

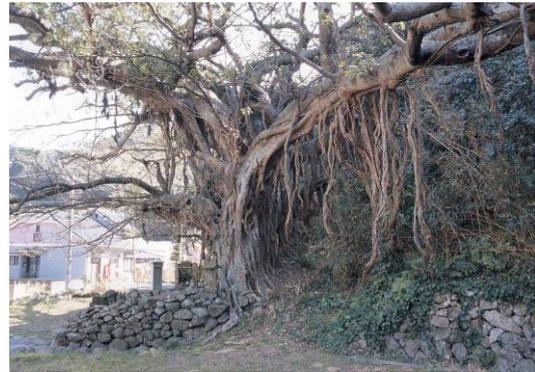


出典：「現存植生図」(1/5万) 旧環境庁、1986

久賀島の植生図



戸岐神社社叢



樫の浦のアコウ

下五島地域の代表的な植生としてツバキの自生があげられる。ツバキは、照葉樹林帯を構成する代表的な樹種で、南西諸島から青森県夏泊半島まで分布している。ツバキの木質は固く緻密で均質であり、かつ木目は余り目立たず、摩耗に強くて摩り減らない等の特徴から工芸品、細工もの等に使われる。また、日本酒の醸造には木灰が必要で、ツバキの木灰が最高とされており、アルミニウムを多く含むことから古くは染色用にも用いられた。木炭としても最高級品として使われてきた。ツバキは生長すると樹高 20m ほどになるが、上記のようにツバキは利用価値が高いため、全国各地でツバキの大木は伐採され、現在ではツバキの大木はほとんど見られない。下五島地域においては、主にツバキ油の採種のために利用されてきた。特に久賀島では村制時代に条例でツバキの伐採を禁じていたため、ツバキの原始林が保護され、ツバキの大木も島内各地に自生している。

ツバキはまた屋敷、畑の防風林としても利用されている。福江島の北西部に位置する三井楽半島には畑の原初的な形態といわれている円畑が広がっているが、冬場の強い北西風などの防風林として円畑を囲むようにして利用されている。また防風林としてだけではなく、ツバキ実の採種や薪炭材としても広く利用され、なだらかな溶岩台地が広がる三井楽地区ではこのツバキ防風林が一種の里山としても利用されてきたことが伺える。

また福江島の南東部に位置する大窄地区では、集落の開拓時に防風林（屋敷林）として植えられたものが大木となり、現在は県指定天然記念物「福江島の大ツバキ」（2 本）として保護されている。



久賀島亀河原のツバキ林



椿の実



久賀島に多く自生する大ツバキ



久賀島に多く自生する大ツバキ



三井楽円畑の防風林(ツバキ)

【ヤブツバキの特性】

我が国に自生するツバキ属は亜種や変種なども含めて次の八種があるとされている。

- ①ヤブツバキ、②ハウザンツバキ（琉球列島に自生するヤブツバキの一亜種）、③リンゴツバキ（ヤブツバキの変種又は品種）、④ユキツバキ、⑤ユキバタツバキ、⑥サザンカ、⑦オキナワサザンカ、⑧ヒメサザンカ

このうちヤブツバキやユキツバキは、世界の原種約 100 種のうちでも最北端に分布し、耐寒性に富むことから多くの園芸品種を生む母体となった。日本各地の山林に最も多く見かけるものがヤブツバキで、普通にツバキといえばヤブツバキを指すほどである。五島において自生するツバキは全てがヤブツバキである。

樹性は立性、多くは単幹で 7～8 m の高木になって海岸付近に群生する傾向を持つ。全国のツバキ巨樹、大木のほとんどがヤブツバキである。都市公害にも強く、日陰でもよく育つため、緑化花木としての価値が認識されてきている。

分布域は先述したように南西諸島から青森県夏泊半島まで分布しており、日本以外では朝鮮半島の南、西部の海岸域、済州島など僅かの地域に限って分布しているのみで、日本固有種と考えると良い。ツバキ属の学名「*Camellia japonica*」がそれを示している。

ヤブツバキに限らずツバキ属は他のツバキ属とも容易に交雑し、多くの種間雑種ができる。このことから古くから品種改良が行われてきており、江戸時代以降大名や京都の公家などがツバキの園芸種を好んだことから、庶民の間でも大いに流行し、たくさんの品種が作られるようになった。

野生にもヤブツバキの変種が発生しやすく、中でも有名なのが福江島玉之浦の山中で偶然発見された玉之浦ツバキが幻のツバキとして有名である。



ヤブツバキの花



幻の名花「玉之浦ツバキ」

②植生による景観

今日の下五島地域における森林のほとんどが人の手が加わり、原始の姿を留める森林はほとんど残されていない。殊に福江島や久賀島ではスギ、ヒノキの植林が進み自然林が非常に少なくなっている。残った自然林も薪や木炭を得るため繰り返し伐採した後にできた二次林

である。

下五島地域のかつての原始の森の原型をよく残すものとして、神社の社叢があげられる。現在の神社社叢は、鎮守の森として森（あるいは山全体）そのものがご神体として信仰の対象になっていたとも考えられ、また、海岸部の森林が魚付き保安林として古来より大事に保護されている場合、必ずと言っていいほど神社が祀られている。ゆえに神社の社叢は、その立地条件から下五島地域の低海拔地、平野部、丘陵部等におけるかつての植生自然の姿を知る手がかりとなっている。

代表的なものとしては、福江島北部の戸岐神社社叢（魚付き保安林）、巖立神社社叢（県指定天然記念物）、笹岳樹叢（国立公園）、南西部の白鳥神社社叢（県指定天然記念物）、岩谷岳の樹叢（水源かん養保安林）、奈留島の権現山樹叢（国指定天然記念物）、船廻神社社叢（県指定天然記念物）などがあげられる。これらの森林は、他の自然林（二次林）と比較して、一見して樹叢形態が異なっており、自然豊かな下五島地域でも特異な自然景観を有している。

先述したとおり五島列島は亜熱帯植物の自生北限地帯となっており、島内各所に亜熱帯系植物の自生が見られる。海岸部にはハマジンチョウの群落が見られ、五島の海岸部における植生的景観となっている。代表的なものは福江島の荒川、奈留島の皺の浦の群落地で、いずれも県指定天然記念物となっている。

亜熱帯系樹木の中には、大木となり地域の重要な景観構成要素となっているものもある。代表的なものとして、福江島北部の檜ノ浦のアコウ、南西部の玉之浦のアコウ（いずれも県指定天然記念物）などがある。

③久賀島の植生

久賀島の植生を概観すると、沿岸域にハマビワ・オニヤブソテツ群集が分布し、内陸部の山中にはスギ・ヒノキ植林が分布している。山中のほとんどがかつて田畑として耕作されたものが雑木林となり、シイ・カシ萌芽林と化している。棚田などの田地が広がる地域には水田雑草群落も分布している。

久賀島の植生を特徴付けるものとしては、ヤブツバキの自生があげられる。平成 21 年度に農林課が実施したツバキ分布調査（約 1 km² 当たり 10 箇所、10m×10m の方形観測地点を設定して調査。コドロード調査（方形区法））、久賀島では 811,580 本のヤブツバキが確認された。これは、他の島と比べても自生密度は非常に高いものとなっている。

久賀島では、ヤブツバキの原生林が 2 箇所所在する。原生林とはいえ、人跡未踏の原始林というわけではなく、古くから人の手によって保護・管理され、ヤブツバキ以外の樹木を伐採することによって形成されたヤブツバキの純林である。

・長浜のツバキ林

久賀島の南東部の海岸に位置し、樹林面積は 6,800 m² ほどである。やや浅い谷合とゆるい斜面に発達しており、土壌は砂礫が多い土質のため痩せ地であり、ために大木は少ない。

おおむね幹まわり 30～50 cm程度のものが大半を占める。林内の植生は貧弱であり、ヤブツバキの下層には1 m前後のカクレミノ、ヤブニッケイ、スダジイ、ハマビワなどが広がり、ツバキ林を取り囲む樹木にはフウトウカズラ、イタビカズラ、テイカカズラなどの蔓性植物が着生している。

林内の植生が貧弱なのは、かつてツバキ実採種のため定期的の下草払いを行ってきたため、ヤブツバキが優勢となり他の樹木が育成しにくかったためであろう。現在でも市の委託を受けて1年に1～2回程度の割合で下草払いを行っている。

現在、長崎県を代表するツバキ原始林として、長崎県の天然記念物の指定を受け保護されている。ツバキ分布調査では、367本のヤブツバキが確認されている。

・ 亀河原のツバキ林

久賀島の南西部に位置し、樹林面積は6.7haほどである。北向きの山の中腹から海岸際まで斜面全体をヤブツバキで覆い尽くした純林である。海岸に近い周辺部のものは直接強風を受けるためか分枝が多く高さ4 m前後であり、一方樹林内部のものは直立し、高さ7～8mと特に大木はないが、幹まわりは平均して45～60 cmほどである。

ツバキ林内には他の樹木はほとんどないが、下層にはツワブキ、シダ類が一面に広がる。また、管理が行き届かないためか、現在ではツバキ林の大部分をツタカズラが覆い尽くそうとしている。ツバキ分布調査では約10,000本のヤブツバキが確認されている。

久賀島ではまた、日本に古くから野生していた日本固有の柑橘類であるタチバナ（現在では希少種となっている）の自生が数本確認されている。

(3) 気候・気象

五島列島は九州の西端に位置し対馬海流に四方を表れているため冬は暖かく夏は比較的涼しい海洋性気候である。世界最大規模の海流である黒潮暖流から分岐して、九州西岸を洗いながら対馬海峡及び日本海へと達する対馬海流の真っ只中に位置する五島列島の気候は、地形的な影響よりはむしろ海流の影響を大きく受けるのは当然のことといえる。以下、五島列島における四季の気候について述べたいと思う。

春は3・4日の周期で低気圧が通過するため九州本土と同様天気の移り変わりは早い、降水量は長崎より多くなっている。これは五島近海の水温が気温より高いためと見られている。この時期の特徴的な気象現象として黄砂現象があげられる。黄砂は、特に中国を中心とした東アジア内陸部の砂漠地帯の砂塵が、強風によって上空に巻き上げられ、春を中心に中国、朝鮮半島及び日本列島など東アジアの広範囲に飛来し、地上に降り注ぐ気象現象であるが、五島列島は地理的位置の関係から本土部よりは早い時期から黄砂が降り注ぐ。近年では気温が高くなる時期に黄砂の影響によると思われる光化学スモッグが発生し、注意報まで出されたことがある。

梅雨期は、気象学的な擾乱による大雨もあるが、地形的影響による局地的大雨はほとんど

確認されていない。また、地形的に山が多く河川は比較的短く流域が狭いので、水害としては洪水よりも、山、崖崩れなどの地面現象による災害が起こりやすくなっている。

夏は、8月を中心に晴天の日が多い。島が小さく周囲の海水温が割合高いことから、日中の日射による対流活動は弱く、熱雷の発生はほとんどない。直射日光が厳しく降り注ぐが、気温は九州本土部に比べ若干低く、真夏日も福江測候所が報告している「五島の気象特性」には、「五島の真夏日34日は、長崎48日、福岡55日、熊本69日、鹿児島69日よりはるかに少ない」と述べられており、五島の夏は九州本土より過ごしやすい日が多いことを示している。

この時期の降水量は全般的に多い方であるが、旱魃の記録も多く、梅雨期の降水量が少なかったり台風による降水量が少ない時は水不足となり、農作物への影響は大きくなる。

台風は7～9月に接近するものが多く、7、8月は五島列島の西側を北上し、9月以降は東側を北上するものが多い。特に島の西側を通過した場合、台風の東側は危険半円となるため、被害は甚大なものになる。7月に接近する台風の数は日本の各地に比べやや多い。とはいえ、五島列島を直撃する台風は平均して毎年1～2個で、他地域と比較して特に多いというわけではない。

秋は台風の接近や秋雨前線の影響により大雨となることもあるが、全般的に曇りや雨の日は少なく晴天の日が多い。移動性高気圧が、大陸から東へ移動してきて日本海北部をゆっくりと通過すると五島付近は晴天であるが、かなりの風速をもった北もしくは北東の風が吹き続くことがある。地元の古老の間ではこれを「あおぎた」と呼んでいる。この風が吹く時は空が晴れ渡り、海の色が青く見えることからこの名があるのであろう。一方低気圧が五島の北を通過すると、それに伴う前線によって天気がぐずつき、雨とともに低気圧に吹き込む南風が強くなる。これを古くから「しろばえ」と呼んできた。「あおぎた」といい「しろばえ」といい、五島で漁業を生業にしている人々にとっては、その生活に深い関心をもっているのである。

また、奈留島に「白這（しろばえ）」という地名があるように、東向きの湾には「東風泊（こちどまり）」、南向きの湾には「南風泊（はえどまり）」という風・気象現象に関わる地名が五島各地につけられているのも特徴である。

冬は日本海側気候に類似し、曇りや雨天の日が多く、厳しい北西風が吹き荒れ、時雨や降雪日が多いが対馬海流の影響で、気温と海水温の差は10度にも達し、五島列島の冬の気温は高めに経過する。しかしながら、最深積雪の記録によると、昭和38年（いわゆる三八豪雪）福江における43cmの積雪は山岳部を除くと九州で第1位である。

この時期に吹く北～北西の季節風は、陸上で風速10～15m程度になる日が月に4～5日もあり、時には突風を伴う風速20mを超える強風が吹くこともあり、小型船舶の航行が危険にさらされる。

五島には、この時期にこのような季節風の他に「西風落とし」と呼ばれる突風が吹くことがある。これは発達した低気圧が日本海に入り、そこから延びる寒冷前線が五島を南下する

ような場合に多い。特に寒気が厳しい時は、突然、海上でにわか雨やにわか雪を伴った突風が繰り返し襲いかかって海は大時化となり、小型の船舶や水産関係の施設に大きな被害をもたらすことがあって恐れられている。

五島市の気象

気温

単位:°C

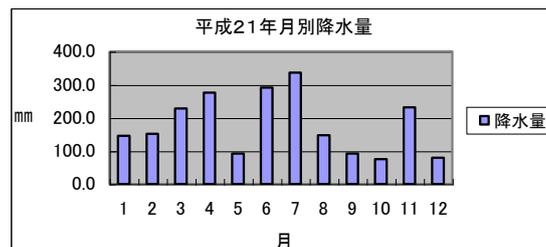
年月	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年
1月	7.0	7.9	8.6	8.6	7.4
2月	6.9	8.2	10.1	6.8	10.7
3月	9.3	10.3	11.6	10.9	12.0
4月	15.2	14.3	14.8	14.9	15.0
5月	18.5	18.4	19.3	18.5	19.0
6月	22.9	22.3	22.6	21.6	22.4
7月	26.7	26.6	25.9	27.5	26.1
8月	27.2	27.6	28.1	27.3	27.0
9月	25.3	23.5	26.2	24.6	24.0
10月	20.2	20.4	20.8	19.9	19.7
11月	14.7	15.8	14.5	14.5	13.9
12月	6.9	10.3	10.9	9.6	12.9
平均	16.7	17.1	17.8	17.1	17.5



降水量

単位:mm

年月	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年
1月	57.0	91.5	36.5	94.0	145.5
2月	175.0	135.0	111.5	46.0	151.5
3月	249.0	113.0	158.0	152.5	228.0
4月	147.5	333.0	138.5	174.5	276.0
5月	140.5	395.5	108.0	233.5	91.5
6月	58.5	386.5	151.0	366.0	291.0
7月	347.0	354.0	365.0	195.5	336.0
8月	174.0	366.5	139.0	218.5	147.0
9月	528.5	362.0	121.5	279.0	92.0
10月	73.0	11.0	62.0	48.0	74.5
11月	265.0	165.0	4.5	116.0	231.5
12月	145.0	48.0	205.5	107.0	79.0
年間降水量	2360.0	2761.0	1601.0	2030.5	2143.5



気象庁調